

教育への「総かり立て体制」の浸食（序説）

Erosion of “Ge-stell” upon Education (An Introduction)

生 越 達
Toru OGOSE

はじめに

最初に私の経験した二つの出来事から考えてみたい。

第一の出来事である。大学院の授業中における現職教員の発言が気になった。平成18年の教育基本法の改正及びその後の教育政策における管理の強化、さらにPDCAの実施のもと教育に管理的側面が強まり、しかも可視化できるものしか見えなくなってきた現状があるのではないかという問いのもと、これからの教育実践をどのように組み立てていったらいいのかということを考える授業だった。それ以前に現代社会が消費社会化、技術社会化のもと、人々がバラバラになっていき、人と人とのつながりが失われつつあるということも扱っていた¹。

私としては、「教えるべきことを子どもに注入しようとする管理的眼差しに対して、子どもの一番身近にいる教師は子ども発信の眼差しをもつ必要あり、教師は教育実践において子どもの思考を大切にすることが必要であり、そのためには子ども理解が重要な意味をもつ」という答えを受講生が語ってくれるだろうと予想していた。

ところが多くの現職教員の答えはそれとは異なるものだった。グループ発表だったのだが、一つのグループは「教員の多くは公務員だから国によって教えるべきことだとされているものを教えるのが仕事であり、子ども理解は（少なくとも公立学校教員にとっての）仕事ではない」と答えた。またそのほかのグループも「最近の教育政策は以前とは異なって子ども理解への配慮が行き届いており、したがって子ども理解への配慮は以前のように必要ないのではないか」といった答えだった。いずれにしても教育政策を誠実に実施することが教師の仕事であり、またそれだけが教師の仕事だと考えていることになるだろう。

学習指導要領をどう実施するかということよりも、子どもとどう出会い、どう理解し、どう寄り添

うのかが教師の仕事だと考えていた私はその意外な答えに戸惑った。彼／彼女らは教育が人材養成であってなんでいけないのだという。国が求める人材を育てるのが教師の仕事なのだからというわけである。私はその後も別の見方はないのかと問い直そうとしたが、自分が空回りをしているのを感じざるをえなかった。彼／彼女らにとって教えることは子どもに「沿う」ことではなく、あくまでも「教師が子どもに教えるという構造」を守ることなのであった。彼／彼女らにとって子どもの思いや思考に「沿う」ことは大切ではないのである。

第二の出来事である。いじめ防止対策推進法が制定されて以来、いじめの重大事案にかかわる第三者委員会を設置しうることになり、実際に多くの委員会が調査を行っている。私もいくつかにかかわっているが、調査のなかで教師にヒアリングを行うことが必要となる。そこで気づいたことがある。話を聴いてみると、教師がいじめという事態に対応していないわけではないことに気づく。校内に委員会を立ち上げ、調査を行い、ときにはアンケートも実施し、いじめの有無を認定し、そしていじめがあれば加害者に謝罪させているのである。

だが、いじめはなくならない。一番の問題は、被害者の子どもや保護者が教師を信頼できなくなっていることである。ヒアリングをすると、「自分はやるべきことはやっていた」と自信をもって答える教師や「被害者の子どもや保護者に問題があるんだ」と答える教師に出会ったりする。だが、実際のヒアリングではそもそもの学級経営や初期対応に課題があることがわかる。

なぜこのような事態が生じるのだろうか。ヒアリング全般をとおして気づくことは、子どもを丁寧に理解しようしていないことである。マニュアルにのっとった対応はしている。そしてマニュアルにもとづいて対処しなければならないことは教師もわかっている。だが、システムにのるだけで、そこに被害者や加害者の子ども、さらには保護者へ寄り添

うということがない。子どもや保護者がどんな思いをもっているか、いじめという事態のなかでどんな苦しみを抱えることになったのかということへの想像力が働かない。最初は教師に期待した子どもたちや保護者も、マニュアルにそってシステムが動いていくうちに、その対応の形式性に、次第に教師への信頼を失っていくのである。とくに最初の段階での対応に丁寧な子ども理解がないことが事態の悪化を招いていることが多い。

事例検討会に参加していても思うことである。教師は子どもを理解することなく、マニュアル的な対応をして済まそうとする。子どもとかかわるからには、そこにはわからないこともあり、迷いが生じるはずである。しかし、現実には、問題となっているエピソードに対して教師が迷いを感じているようには見えず、なぜか不思議な自信をもって実践しているように見えることがしばしばある。そして、こうした関係のありかたから子どもたちとの信頼関係にひびが入っていくことがしばしばある。教師は対応しているつもりでも、空回りを続けるうちに、ますます子どもたちや保護者は教師への信頼を失い、したがって何をしようにも事態は悪化していくのである。教師は、子どもの思いや思考を理解し、それに「沿う」ことを重視していないし、またできないのである。

これら二つの出来事から、私は学校に子どもに「沿う」力が失われてきているのではないかと感じるようになった。その一因として学校の多忙化があることは確かであろう。だが、多忙化のなかでも子ども理解、子どもに「沿う」ことの大切さが理解されていれば、すくなくとも授業での現職教師の発言やあるいは第三者委員会での教師のヒアリングへの答えはないはずである。私はいくら物理的には近くにいても、もはや教師は子どもたちの「近く」には存在していないのではないかと、それどころか「近く」にいるということ自体が難しくなっているのではないかと感じざるを得なかった。「沿う」ことの欠如のうちに「近く」にいることの困難性があるのではないかと思ったのである。

最近「ブラック校則」が話題になったりしているが、私はここには子どもに「沿う」ことのできない教師の焦り、「沿う」ことかわりに「管理」にしがつくことで自らの権威を守ろうとしている教師

の焦りを感じるのである。実質的な権威を失った教師は、現代のすべてを可視化する状況に依存し、権威を可視化しているように見える校則で子どもたちを管理しようとする、あるいは管理できないまでも自分の身分を守ろうとする。そうしたことが生じているように思えるのである。

これはもはや教育の問題だけではないのだろう。社会のなかに「近さ」が失われている。これまでに何度か技術社会について論じた際にも考えたことである²。当然のことながら、教育もこの社会の影響を受けている。だが、二つの意味で、この事態を仕方ないとは言っていないように思う。一つは、こうした事態に子どもたちは教師への信頼を失っているということがあるだろう。もう一つは、このような社会の技術化というべき事態に対して教育はどのような態度をとるべきなのかをもう一度考えなければならない時代が来ているということもあるだろう。教育はこの社会を変える力をもった営みだと考えることもできるが、そうだとすると教育が社会の技術化をどう考えていくかは一層重要な意味をもっているはずである。

拙論では、まずハイデガーの思索、とくに「総かり立て体制 (Ge-stell)」という概念を取り上げ、ハイデガーは現代社会をどのようにとらえていたのかを考えたい。その後、こうした社会の動向に対して私たちはどのように向き合うべきなのかを考えるための示唆を得るために、自然農に目を向けて考えてみたい。

1. ハイデガーのとらえる技術社会と「総かり立て体制」

(1) 『ブレーメン講演』におけるハイデガーの思索

ハイデガーにおいて、技術に関する思索はこの世界の在り方そのものにかかわっている。技術は世界の一つの要素などではなく、むしろ世界の在り方を規定する原理なのである。後に述べるがこの原理が「総かり立て体制 (Ge-stell)」³として特徴づけられている。そしてハイデガーによれば近代社会は、すべての存在者が「総かり立て体制」のなかで「役立つもの」として意味づけられ、「計算的思索」の対象となる。「総かり立て体制」は、あらゆる存在者の存在に意味を与える枠組みとして機能している。

技術は先進技術にのみかかわっているというわけではなく、世界そのものが「総かり立て体制」によって色づけられてしまう。したがって技術の本質はけっして技術的なものではないのである。

人間もまた例外ではない。したがって人間が技術の支配者（主人公）たることはありえないことになる。技術が人間の行為を規定し、そして人間は最たる「在庫品」として「総かり立て体制」に寄与しているのである。このように考えを進めてくると、「総かり立て体制」が人間を支配しているのであり、技術の在り方が社会を決定しているのであって、乱暴な言い方だが、技術がこの世界で神の役割を果たしていると考えられることでもできるだろう。

ここで課題になることは何であろうか。それは技術に対してどのように準備しておくかということであろう。ハイデガーは「本当に無気味なことは、世界が一つの徹頭徹尾技術的な世界になる、といふことではありませぬ。それより遥かに無気味なことは、人間がこのやうな世界の変動に対して少しも用意を整えてゐない、といふことであり、私共が、省察し思惟しつつ、この時代に於て本当に台頭して来てゐる事態と、その事態に適はしい仕方に対決するに至るといふことを、未だに能くなし得てゐない、といふことであります」⁴と述べている。技術が世界を支配していること以上に、私たちがそのことに気づいていないこと、したがって技術による支配に抗した何の準備もできていないことが問題だとハイデガーはとらえる。

それでは技術社会に対して用意をする、あるいは対決するとはいったいどのようなことなのだろうか。ハイデガーは、原子時代の歴史的進行にブレーキをかけたり、その進行を意のままに操ったりすることは出来ないと述べている。私たちが技術の支配者でない以上、技術社会の到来に対して、それをコントロールすることはできない。そしてハイデガーの思索に学ぶかぎり、単に原子力へ向けられた技術を、風力や太陽光といった自然エネルギーを用いる技術に転換させても「総かり立て体制」を瓦解させることにはならないのである。このような歴史的必然とも言える「総かり立て体制」に対して、私たちはどのように向き合うことができるのだろうか。

ハイデガーの思索は上記のような現代社会の状況に関してどのような示唆を与えてくれるのだろうか

か。拙論では『ブレーメン講演』を読み解くことに限定して考えてみることにしたい⁵。

ハイデガーは、この連続講演の「まえおき」において、「近さ」という概念に注目をして、現代社会を「長い間隔をどんなに短い隔たりへと縮小したとしても、近さがいっこうに現れない」⁶社会だととらえる。そして「一切は、画一的に隔たりを欠いたもののうちへといっしょくたに押し流されてしまう。どうだろう。隔たりを欠いたもののうちへとこのようにいっしょくたに押しやられてしまうことは、すべてが入り乱れてはじけ飛ぶことよりも、なおいっそう無気味なことではないか」⁷と考える。ハイデガーにとって原子爆弾や水素爆弾は、現代社会に生じていることの「最後の噴出」⁸に過ぎないのだという。私たちは、どうしても原子爆弾や水素爆弾の危険性に目を奪われてしまうが、それは浅薄な眼差しなのである。私たちは、原子爆弾の無気味さについては理解できるが、実はすでに「もうずっと前から現に到来してしまっており、しかも現に生起してしまっている」⁹ものがあるのである。私たちはそれを見てこようとしなかったのである。

もちろん、ハイデガーは、やはり原子爆弾や水素爆弾の出現を重大な危機だととらえていることもわかる。「水素爆弾を一つでも起爆させれば、最悪の可能性を考えると、地球上のあらゆる生命を絶滅させるにおそらく十分なのである。そんな途方に暮れるしかない不安に襲われていながら、何を呑気に待ち構えようというのか。戦慄すべきものが、もう現に生起してしまっているのだとすれば」¹⁰と述べている。つまり、現代社会（この講演がなされたのは1949年）は待たなしの危険な状況にあるのである。

そしてハイデガーは、この戦慄に陥れるものの到来と「近さ」が現れないことを結びつけて考えている。「近さ」と距離が少ないこととは別のことである。距離と「近さ」は別の概念である。むしろ距離の除去は「近さ」を見えなくさせる。「近さ」を、そして「隔たり」を失ってしまったことが、現代技術への眼差しをある一定の方向へ誘導し、そのほかの可能性を閉ざしてしまっているのである。私たちは技術社会の危険性を理解するために「近さ」を理解することを求められる。

第一講演では、「近さ」をとらえるために「物

(Ding)」に注目する。それはまずは「近くに有るもの」である。ハイデガーは「瓶」を例として考えている。彼は具体的に丁寧な瓶の本性を記述していくが、瓶は「捧げることの全体」として世界の四大(四者)である「天空—大地—神的な者—死すべき者ども」を指示している。瓶には四大が、したがって世界が宿っているのである。「宿り続けさせる〈verweilen〉はたらきは、出来事として本有化する〈ereignen〉」¹¹。つまり「物」には世界が宿っているのであり、その働きをハイデガーは「物化」と名付けている。「物」には世界が現れているのである。したがって「物」は、今日の技術社会への向き合い方を考える際に示唆を与えてくれるはずである。そしてハイデガーが、「物」の概念を思索するということには、ハイデガー自身が危機にこそ救いはありと述べているように、その思索の内に新しい世界の在り方へとたどり着く可能性が隠されていると考えることもできるだろう。

いっぽうハイデガーは、科学的知識について次のように述べている。「科学的知識はその領域、つまり対象の領域において強制力をもっているが、物を物としてはとっくに虚無化してしまっている。これは、原子爆弾が爆発した時点よりもずっと前からそうなのである」¹²。

「瓶の本質を見いだすとき、われわれは同時に、近さの本質にも気づく。物は物化する。物化しつつ、物は、大地と天空、神的なものどもと死すべきものどもを、やどり続けさせる。やどり続けさせつつ、物は、この四者をそれらの遠さにおいて互いに親しく接近させる。親しく接近させるはたらきは、近づけるはたらきである。近づけるはたらきこそ、近さの本質にほかならない」¹³と述べている。四者を遠さにおいて互いに親しく接近させることという近さの本質が、「物」を「物」として到来させる。いっぽう、技術社会は「物」を虚無化してしまい、その結果「近さ」は現れることはできない。

第二講演では、「物」の消失が生み出すものについて思索されている。つまり第一の講演で述べられている「物」と世界の関係が現代社会において崩れてきている状況が記述されているのである。ハイデガーは「総かり立て体制 (Ge-stell)」という概念を提起する。二つの〈世界〉が対比されることになる。「物」が物化し世界が世界する「世界」と「総かり

立て体制」がすべての存在者をかり立てる〈世界〉である。後者の〈世界〉では、「徴用され立てられた物資〈Bestand〉(在庫品)が「物」にとって代わる。そこではStellen(立つこと)が支配し、つまりStellenが積み重なって集まっていく(ge)のである。それが「総かり立て体制」である。

ハイデガーは、たとえば棺の制作(Herstellen)(制作して—立てるはたらき)と対比させて徴用して建てることとして大都市の機械化された葬式産業を挙げている。また原子力についても、「鉱物はウランに向けて、ウランは原子力に向けて、原子力は徴用可能な破壊行為に向けて」¹⁴かり立てられているととらえている¹⁵。徴用可能な破壊行為というのは、広島・長崎への原爆投下のことばかりではなく、原子力の平和的利用をも含んで使われている。そう考えると「総かり立て体制」の支配の深さがわかる。

あるいは、農業についても次のように述べている。「徴用して立てるこうしたはたらきは、かつて農夫が畑を耕して収穫した仕方とは、およそ異なっている。農夫が行う仕事は、耕地を挑発しはしない。農夫の仕事は、むしろ、種をその成長力に安んじてゆだねる。つまり、種が伸び栄えるべく守り育てるのである。ところが、畑を耕して収穫する仕事さえも、いつしか、徴用して—かり立てるはたらきへ移行してしまった。……いまや農業は、機械化された食糧産業となっており、その本質においては、ガス室や絶滅収容所における死体の製造と同じものであり、各国の封鎖や飢餓化と同じものであり、水素爆弾の製造と同じものなのである。」¹⁵ハイデガーが農業を機械化された食料産業として位置づけ、それをガス室や絶滅収容所における死体の製造と同一視していることは見過ごされてはならないだろう。技術を平和利用に限定すれば「総かり立て体制」の支配が消えるのではない。「総かり立て体制」の恐ろしさは、その見え方が平和的であり、喜ばしいことであるからこそ強く私たちに迫ってくるのである¹⁷。農業もまた「総かり立て体制」の支配を免れることはできなくなっている。あるいは農業でさえも支配されてしまうほど「総かり立て体制」はすべてを支配し始めているのである。「総かり立て体制」のもとでは、農夫から、作物の成長力にやすんじること、そしてその成長力を守ること、といった受動性は奪われ、彼らは収穫の増大や効率化に向けて挑発されるので

ある。

ハイデガーは『放下』のなかで次のように述べている。「ひとは、今始まりつつある時代を近頃、原子時代と名づけてをります。この時代の否応なしに押し掛かって来る最も著しい目印は、原子爆弾であります。併し、この目印は単に、事態の前景に存する目立った一つの目印にすぎないのであります。何故ならば、原子力が平和的な諸目的のためにも利用されるといふことは最早認識されてゐるからであります。そのために、今日原子物理学やその技術家は到る処で、原子力の平和的利用を遠くに諸計算にもとづいて実現しようとしてゐるのであります。……ひとは、原子企業のうちに新しい幸福を認めてをります。そして原子科学も、さういふ掛声の外に離れてはゐないで、この幸福を公然と告知してゐるのであります。」¹⁸さらには現代の状況を示唆するように次のようにも言っている。「現代の科学と技術との根本の間は最早、次のやうな問、すなはち、我々は、必要に足りだけの燃料や動力源を、何処から獲得して来るかといふ問、ではありませぬ。決定的な問は今や次のやうな問であります。すなはち、我々は、この考へる〈表象する〉ことが出来ない程大きな原子力を、一体如何なる仕方でも制御し、操縦し、かくして、この途方もないエネルギーが突如として一戦争行為に依らなくても一何処かある箇所を破つて脱出し、いはば《出奔》し一切を壊滅に陥し入るといふ危険に対して、人類を安全にして置くことが出来るか、という問であります。」¹⁹私たち人類は、「総かり立て体制」の危険に対して、どうしたら安全を守ることが出来るのだろうか。

それでは「物」が物化することと、すべての存在者が「総かり立て体制」に追い立てられることとは、何が異なるのだろうか。後者においては行き着く先がないということが挙げられる。「そのような徴用して立てるはたらきの連鎖は、最終的にはどこへ行き着くのであろうか、と。この連鎖はどこにも行き着かない、というのがその答えである。……徴用してかり立てられたものは、つねにすでに、またつねにひたすら次のことをめざして、かり立てられている。つまり、徴用される別の何かを、おのれの帰結の連鎖として、得られた成果のうちへかり立てることをめざして、である。……おのれの連鎖の円環運動のうちへ入り込んで行くだけである。」²⁰つま

り、「徴用して立てるはたらき」は、決して安らわず、終わりなく拡大していく連鎖のなかに呑み込まれていくことなのである。それに対して制作においては、作られた「物」は完成に達し、そして完成品としてこの世界にどっしりと位置づくのである。「総かり立て体制」とは循環する円環運動を永遠に繰り返すことそれ自体なのである。

ハイデガーは、人間もまた「総かり立て体制」の例外ではないととらえる。人間もまた徴用して立てる働きの本質の内に算入されていくのである。「人間自身がいまでは、そのような召集のうちに立っている。人間は、そのような召集が遂行されるべく、この召集におのれを差し出す。人間は、徴用して立てるそのようなはたらきを引き受け遂行すべく、待機して立っているのである。したがって人間というのは、徴用して立てるはたらきによって立てられた雇われ人でしかない。……いまや人間とは、徴用して立てるはたらきのうちで、このはたらきにもとづいて、このはたらきにとって、徴用して立てられたもの、なのである。」²¹人間もまた徴用の連鎖の中での一つの雇われ人、つまり在庫品に過ぎないのである。そして「人間は、徴用物資を徴用して立てるはたらきの内部では、取り換え可能である。」²²たしかに「人間は、機械とは完全に異なった仕方でも、総かり立て体制に属している。」²³だが人間もまた「総かり立て体制」のなかにかり立てられている（stellen）ことに変わりはない。こうした状況のなかではつねに人間は取り換え可能な在庫品に過ぎない。したがって現代社会では人間は本質的に自己肯定感をもつことはできなくなるのである。

「総かり立て体制」においては、人間もまたその体制のなかに一要素として組み込まれていくのだが、欲望をもつ存在としてあたかも主人公であるかのようにして組み込まれる。人間は「挑発（herausfordern）」されているのである。人間は、主体的に行動しているように思っているが、実は自発的ではあるが「総かり立て体制」のなかに呑み込まれ、自らの働きを仕向けられているのである。とくに欲望に挑発されてしまっている。「総かり立て体制」は、人間の自発性に働きかけることによってカモフラージュする。「総かり立て体制」は、徴発や召集からもわかるように、戦時下の総動員と同じ意味をもっている。つまり私たち人間はいやいや

技術に従わされ奉仕させられているのではなく、みずから自発的に「総かり立て体制」のなかに入り込んでいるのである。そして、だからこそ危険なのである。

教師の存在に戻って考えてみよう。教師もまた「総かり立て体制」のうちに呑み込まれてしまっていると考えることはできないだろうか。技術社会を支える人材(子どもたち)をつくり出す人材(教師)として、二重の意味で、「総かり立て体制」のうちへと挑発されてしまっている。まさにPDCAサイクルを実施する主体として自らの実践を行っているという見かけのもとで、教師は技術社会の在庫品となっていく。教師教育の重要性が言われ、教師が研修活動に勤しめば勤しむほど、教師は技術社会に呑み込まれ、「総かり立て体制」に組み込まれていく。このようなことが教育において生じていると考えることはできないだろうか。そうだとすれば様々な研修を受講すればするほど自発性のカモフラージュのもとに在庫品と化していくということが生じてしまうのかもしれない。

「総かり立て体制」が意味することは、すでに述べた「物」とどのように異なっていると考えることが出来るのだろうか。「物」においては四大(四者)が反映していた。すべては「隔たり」、「近さ」の内にあり、つながりあっていた。ところが「総かり立て体制」においては、存在者はみな一要素として切り離され、挑発されているのである。そのものの本質、そして世界とのつながりが大切にされるのではなく、生産性の拡大と効率化という目的のもとに収奪されていく。そして「総かり立て体制」においては、すべては循環の中に呑み込まれ消費させられている。その結果、消費社会が生み出されるのである。

再度教育に視点を戻してみよう。教育実践もまた四者を反映させ、「近さ」を取り戻さなければならぬのではないだろうか。だが、そもそも「近さ」を取り戻すことをどのように考えたらいいのだろうか。天空、大地、神的なもの、死すべきものの四者を反映し、捧げることとして近さを取り戻すといってもどうしていいのかわからない。だが、少なくとも、教師自身、自らが人材養成の最たる道具になっているかもしれない危険性を眼差すことはできるかもしれない。そして自らの自発性に頼ることの危険性、むしろ自分が四者の反映の内に存在する受動的

存在であること、したがってつながりを強く意識しなければならぬことを自覚することが求められていると考えることもできるだろう。

2. 自然農とは何か

(1) 思索するとはどのようなことか

ハイデガーは言っている「原子時代の人間に果して何等かの土着性が授けられるであろうか」²⁴。ここでハイデガーが「土着性(Bodenlichkeit)」と呼んでいるものはいったいどのようなものなのだろうか。ハイデガーは、ラジオやテレビ、週刊誌に縛りつけられた私たちは故郷を失い、世界から疎外されていると考える。現代で言えばネット世界への浮遊と言うことができるだろうか。現代においては、ネット社会が大地や天空よりもずっと身近なものである²⁵。これらの事態をハイデガーは「土着性の喪失」と呼ぶ。

そしてこのような時代状況のなかで、真の思索からの逃走が起きる。そこでは計算的思索のみばかりが思索であるかのような仮象が支配する。計算的思索が世界を支配する。その結果世界は「世界」たりえないことになる。計算的思索の意味することは思索という名の「思索からの逃走」なのである。思索のない時代が今日なのである。しかし人間が思索する存在だからこそ逃走も生じるとするならば、私たちはこの危機を思索することで新しい時代を創造することができるようにも思う。

計算的思索を超えた思索が真の思索である。「私共が計画を立てたり、探究を行ったり、企業を設立したりする場合には、与へられた周囲の諸事情を絶えず計算する、といふことであります。私共は、それらの諸事情を、一定の諸目的を目指して算定された企図に基づいて、計算の内に入れるのであります。私共は又、一定の成果を当てにして予め計算するのであります。このやうな仕方での計算といふことが、計画し探求するすべての思惟を、特色づけてあるのであります。」²⁶しかし、続けてハイデガーは次のように言っている。「計算する思惟は決して省察する思惟、つまり、有るといへる事柄のすべての内に有つてそれらを統べてゐる意味に、思ひを潜めて追思する思惟ではないのであります。」²⁷さらに続けてハイデガーは次のように言う。「省察する思惟は、

計算すると同様に、放つて置いてもおのづから生じて来る如きものではない……省察する思惟には時として、計算する思惟の場合より、一層高度の労苦が要求されますし、一層長きに互る修練が求められます。」²⁸

これらの引用から、ハイデガーが思索としてとらえていることは²⁹、計算的思索と異なり、労苦の必要な困難な手仕事であり、存在者の内に統べている意味を「見護りつつ待つ」³⁰ような思索なのである。そのために思索する者は、世界を「近さ」の内に置かなければならない。そして「近さ」の内に生きることは故郷を生きることであり、土着性を取り戻すことなのである³¹。

以下、私たちは、生産拡大と効率性の目的のもとで「総かり立て体制」に呑み込まれ、一つの在庫品としてシステムの内に入り込まれてしまうことから自由になるために、農業について考えてみようと思う。なぜなら農業は「物」や「芸術作品」と同様に、大地や天空との関係のなかに成立し、見護りつつ待つことを必要とする営みであるように思われるからである。以下農業を「自然農」に焦点をあて、またとくに川口由一の思索を取り上げながら考えてみたい。

（2）自然農とは何か

辻井は言う。「世界中の農業は近代化の果てに、今やいのちの世界から遠く隔たった場所に行きついてしまっている。農と食という、つまり人類の生存の基盤そのものが、市場競争の中にまきこまれ、さらにグローバルな自由貿易の渦中に放りこまれてしまったのだ。生産性向上と効率化の名の下に、多くの農家はより大規模な農場に吸収されて、自由的な農の営みは解体され、農民とその子弟の多くが都会へ流出することを余儀なくされた。農村は換金作物の大規模な単一栽培を行う工場と化し、そこにかろうじて居残った者の多くも、機械や化学肥料や農薬をはじめとする工業資材を消費する側となり、多くの負債を抱えながら、巨大な社会システムへの依存度を増すばかりだ。」³²。ハイデガーはこうした農業の工業化を「総かり立て体制」の一つの現れとして見、そして予言していた³³が、ハイデガーの予言通りのことが現実になっているのである。

こうした状況に対して自然農はどのように向き

合おうとしているのであろうか。川口は、「人という生き物だけが、いのちの道からはずれた」³⁴と考える。「いのちの世界はすべて一体にして、個々別々」³⁵であり、「今生きているいのちも、過去のいのちも、未来のいのちとも、切り離すことのできない、ひとつの存在でありいとなみ」³⁶であると考え。いのちは空間や時間を超えて一つのものなのである。だからこそわたしが生きるとは、生かされていることなのである。

川口は実際に農業の根本にある「土」にいのちの営みを見る。土は亡骸³⁷を重ねつついのちのつながりをつくり出している。雑草も作物も、虫もともにそこで生き、そして死に、いのちとしてつながっていく。だからこそ、私たちはいのちが調和しながら存続し続けていることを邪魔してはいけないのである。川口が耕さないことを自然農の根底においていることは、いのちの営みから成り立つ土を壊してしまうことを避けるためである。

農業において人間は「いのちの道」から外れてはならない。つまり世界を織りなしている「つながり」を断ち切るようなふるまいをしてはいけない。川口はそのようなふるまいをする可能性があるのはこの世界で人間だけだと考える。そしてこの「つながり」を具体的に示しているのは土である。土はいのちの道、いのちのつながりを宿した場である。時間的にも空間的にも土はつながりの中にあり、そのなかには当然死者（死体）も含まれている。人間はこのいのちのつながりに従うべきなのである。

具体的には、川口は耕さないことが大切だと考えている。耕してはいけないのである。「耕さない」ということが川口の自然農において、いのちのつながりのなかの本質的な人間の態度を表している。生産量増大や効率性に目を奪われ、土を耕そうとすることは、いのちのつながりを断ち切ってしまう絶対にしてはならないふるまいなのである。

耕すことが農業の近代化の出発点であり、農業が「総かり立て体制」に呑み込まれていく出発点だということになる。川口は、農業そのものに問題があるのではなく、「農のあり方、生活のあり方、人為の仕方が自然の摂理からはずれたものだったことが問題」³⁸なのだと考える。すべてのいのちが自ずから然らしめているのに対して、余計なことをしないことが大切なのである。余計なことをすることを彼

は「貪り」³⁹と呼ぶ。人間の「貪り」はいのちの調和を壊すのである。川口はハイデガー以上に、農業が「総かり立て体制」へと加担し始めた時期を早い段階に認めていることになるだろう。

川口は、太陽エネルギーだって同じだと考える。太陽エネルギーがいくらクリーンなエネルギーだとしても、そのエネルギーを貪るとすれば、やはりいのちの調和は壊されるのである。川口はまた「いのちを観る」⁴⁰ことが大切だという言い方をしている。また「いのちの道」⁴¹という言い方もしている。

この「いのちの道」は必ずしも自然農を行う人たちのみによって実践されるものではない。すべてはつながりあっており、簡単に善や悪として区別することなどできないのである。川口は教育者にも触れているが、「いのちの道」の実践は、農業実践のみに限られることではないだろう。人間の生き方の基本的な構えが「いのちの道」なのである。川口の自然農における大地や天空とのかかわり方は「物」における四者の反映、物化することと深い関係があるように思われる。

またハイデガーは芸術作品を取り上げて思索しているが、川口も自分の人生に芸術を取り入れようとした。川口は自分の人生を芸術的人生と呼んでいる。「定住型の変化なき単純なくり返しの農的暮らしの中で、芸術的人生を極めていこう」⁴²と考えたのである。拙論で論じるとはできないが、「総かり立て体制」を相対化する眼差しを獲得するために、芸術作品の鑑賞及び制作における大地や天空との統一といったことが重要な意味をもち、大地や天空との関係において、芸術作品が制作されていくこと、その意味で決して私たちの一方的な計画や意志によって芸術作品が制作されるものではないこと、このような受動的なあり方、大地や天空に生かされている在り方のなかに芸術の創造性があることは、ハイデガーと川口に共通した見方であるように思われる。川口はこのような世界との芸術的関係をそのまま農業実践に生かそうとした。

川口は次のように言っている。「田んぼによってこそ、自分が生きてゆく基盤があることに気づきました。」⁴³私があって田んぼがあるのではなく、田んぼがあって私の生が成立する。私であろうとすればするほど「総かり立て体制」に呑み込まれていく。そうではなく、自然に寄り添おうとしたときに、私

は私になる。川口はそう考えたのである。

川口は次のようにも言っている。「地球に人間だけでは存在しえず生きられず、同様に、水田にお米だけ、畑にキャベツだけでは、健全に育ちえずです。多様な草々や小動物が同時に生きて生かし合いになります。」⁴⁴「自然農は自然の営みといのちのある作物に『沿っていく、応じていく、従っていく、そして任せる』」⁴⁵。したがって自然農はできるかぎり自然に任せようとする。雑草にも意味がある。害虫も駆除しない。そして自然に任せる。当然農薬も肥料も使わない。できるかぎり自然の状態を維持することで作物も健康に育つと考えるのである。川口は作物の子ども期等には最低限の手をかけるが、それ以外は、自然に任せるのである。

川口は「沿う」という言い方をする。もちろん自然農は採集生活に戻るわけではなく、栽培をすることなのだが、そこではあくまでも「沿う」ことに従って栽培を行うのである。一見、栽培することと「沿う」ことは矛盾するように思われる。だが、このぎりぎりのところに自然農は成立する。川口は「沿う」ことをめぐって次のように言っている。「いのちの世界がどうなっているのかを知らないときできません。そこでいのちあるものはどのように生かされ、どのように生きているか、それぞれのいのちといのちの世界をよく見きわめ、知った上で、澄んだ深い知恵で正しく沿う、従う、応じる、そして任せる、です。」⁴⁶。「いのちの世界には、害虫益虫の別はない。ゆえあって存在しているいのちであって、決して敵ではなく、なくてはならないいのちたちです」⁴⁷。「沿う」ためには、まずはいのちの世界をよく見ること、見極めることが必要で、そのうえで沿い、従い、応じ、任せるという受動的態度をとることが必要なのである。

従来の農業では、「有限にして大切な物を浪費し、地球生命体を損ね破壊し、生命圏を汚染し、そして自然界の秩序を乱し壊して、危険な状況に追いやっています。実って得られるエネルギーから、持ちこむエネルギーを差し引くと、マイナスになる。」⁴⁸また川口は次のようにも言う。「外から持ちこむものに依存し、自然本来の環境でない異常な田畑で育った作物は、私たちを健康に育ててくれるに必要ないのちを宿していません。」⁴⁹川口は、外からできるかぎり何も持ち込まないことが必要なのだというので

ある。

川口はいのちの道と言っているが、わたしたちが大きないのちのつながりのなかに生かされていることを意識することで自然農は成立する。この生かされているという受動性は、ハイデガーが物化することや芸術作品を制作する際に述べていたことと重なっているように思われる。このような受動性、つまり「沿う」ことは、自然農の本質であり、また私たちが現代社会において「総かり立て体制」に呑み込まれない生き方をすることによって重要な意味を持っているのではないだろうか。

教育もまた「沿う」ことの受動性を忘れなければ子どもを人材として育てるという最たる人材養成の道具になることを避けることが出来るのではないだろうか。教育もまた、沿い、従い、応じ、任せることについて考えてみなければならぬように思う。ここでは川口が土を耕さないといったことは子どもに置き換えることができるように思う。子どもをむやみに耕さないこと、子どもに沿い、従い、応じ、任せることの可能性を教育は考えてみる必要があるように思うのである。

川口は人生を目的的に生きることに関しても疑問を提起する。「四十七億年前の地球の誕生も、数百万年数十万年前の人類の誕生も無目的であり、宇宙の存在そのものも、目的なき存在であり、今も明日も無目的です。」⁵⁰。そして「生きている、生かされていることがわかれば、存在そのものの恐れ、虚しさ、悲哀から、生きる意味へ、意義は、悟りは、やがては生きる覚悟へ、そして安定、安心、さらに喜びへ、感謝の思いへとつながります。」⁵¹人間の生は大きないのちの流れのなかにあるのであって、いのちは狭い私の自我の内に閉じ込められるものではないのである。自分の存在が大きないのちに生かされていることを知るとき、私たちは私らしく生きることが出来るようになる。川口はそれを「我の道」と呼んでいる。いのちの流れを生きることにより、私は「我の道」を信じて生きることが出来るようになる。なぜなら「死ぬまで生きることが約束されており、死後なお次への確実に運ばれてゆくという気づきからの安心」⁵²が生まれるからである。

だが、果たして現代の教育にこの受動性を生起させることは可能だろうか。それは、もともと学校教育が人材養成のための一つのシステムとして始まっ

ていることを問い直すことでもあるように思う。だが、「はじめに」で述べたように、人材養成のシステムとして機能することにおいてほころびが見えてきていることも確かなことのように思う。だとすれば、ハイデガーが危機にまた救いがありと考えたように、現実に現れている教育の危機のなかに、新しい方向性を探ることが出来るようにも思われる。

3. おわりに—これから教育はどこに向かうべきなのか

川口は言っている。「幼年期から少年期までは、他の草に負けないように手を貸してやる。あるいはすべての作物個々の性質があるから、その性質に応じ従い、ふさわしい環境を整えてやらなければいけないということがわかってきました。つまり、こちらから形を決めてはだめなんだと」⁵³。こうした考え方を教育に応用するとどのようなことになるのだろうか。川口は「少しだけ手を貸す」⁵⁴と言っている。これは教育の可能性についてもいえるのではないだろうか。教育するとは子どもをすべてコントロールしようとするのではなく、子どものいのちの流れを信じ、待ちながら、少しだけ手を貸すことなのではないだろうか。

それでは少しだけ手を貸すとはどのようなことなのだろうか。拙論では詳しく論じることはできない。だがここまでの検討のなかでいくつかの示唆は得られたように思う。

第一に、教育は「貪る」営みになっていないかということである。教育が子どもの存在への眼差しを失い、耕すことばかりに目が向いてしまっていないかということである。ハイデガーが「物」に関する思索で述べているように、計算的思索に囚われるとき、「物」は物化することがなくなり、「総かり立て体制」に呑み込まれてしまう。教育においても、教師が子どもをひとかどの人材に育て上げるといった考え方に支配されるとき、教師の心は「貪り」に支配されてしまう。子どもは一人の子どもではなく、完成した製品（有用な人材）のための材料になってしまう。そこでは教師がいくら子どものそばにいても「近さ」は現れない。どんなに距離を縮めても「隔たり」は生じないのである。

第二に、いのちのつながりのなかに子どもの存在

を位置づけることである。そのためにはすべての存在者がいのちのつながりの中を生きていること、つまりはいのちのつながりのなかで生かされていることを実感できる環境を準備することが大切である。この点は教育内容としても教育方法としても考えられうるであろう。すべての存在者がいのちのつながりにあることを教育内容として扱うこと、そして他者との対話をとおして、他者の異質性を感受できるような実践方法を用いること、そしてそうした授業をとおして「私の道」にたどり着けるような教育実践を積み上げていくこと、そうしたことが求められているのである。対話において対等性、異質性が求められるからには、常識的な授業のリズムに変調を与えるような子どもたちが大切にされなければならない。そうした子どもたちがトリックスターになって、授業の質が変わっていく。授業は、計算的思索に支配されることなく、予測可能性、制御可能性を超えていくことを求められる。教育実践は、PDCAサイクルの内に呑み込まれるようなものであってはならないのである。

第三に、そのため教師には子どもに「沿う」受動性が求められる。だからこそまず教師は子どもの世界を子どもの側から徹底的に見ることを求められる。子どもの世界を子どもの側から見るということは能動的な行為に思われて、きわめて受動的な態度を求められる営みなのである。そしてこの受動的な態度をとるためには、きわめて能動的な構えが求められる。子どもに「沿う」ことはこのように能動的受動性を身につけることを教師に求めるのである。

本研究の一部は日本学術振興会学術研究助成基盤研究(C)(課題番号19K02390)の助成を受けて行われた。

注

¹ こうした点については、私が教職大学院の教員になってからの私の関心でもあり、また講義等をとおしてずっと考えてきたことである。林竹二の思索を中心に考察している。「教職大学院で育む実践力—林竹二とM.ハイデガーの思索にもとづいて—」(『茨城大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻(教職大学院)年報』第2号、2018)、pp.3-26。「教職大学院で育む実践力(2)—新し

い教育基本法のもとでの「子ども理解」の重要性—」(『茨城大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻(教職大学院)年報』第3号、2019)、pp.3-26。「教職大学院で育む実践力(3)—授業といじめ予防の共通性—」(『茨城大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻(教職大学院)年報』第4号、2020)、pp.3-26。「教職大学院で育む実践力(4)—生命への畏敬から生まれる対話としての教育—」(『茨城大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻(教職大学院)年報』第5号、2021)、pp.3-32。「教職大学院で育む実践力(5)—対話をめぐるエッセイ—」(『茨城大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻(教職大学院)年報』第6号、2022)、pp.3-28。

² 「存在の不安と信じることの喪失—ハイデガーの「近さ」の概念にもとづいて—」(『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』61号、2012)、pp.397-410や「ハイデガー技術論に関するスケッチ」(茨城大学教育学部紀要(教育科学)55号、2006)、pp.267-284。さらにはそのような社会への批判として「ミヒャエル・エンデ『モモ』における聴くこと」(茨城大学教育学部紀要(教育科学)55号、2006)、pp.247-266。

³ Ge-stillについては、「集立」、「立て組み」など様々な訳が当てられてきているが、拙論では注6の文献における訳にしたがって、「総かり立て体制」と訳すことにする。

⁴ ハイデッガー、『放下』(理想社、1963)、pp.22-23。この本からの引用は出版が古いために旧仮名遣いや旧漢字が用いられている。旧仮名遣いについてはそのままし、漢字は現在使われている漢字に変更してある。

⁵ ハイデッガーは上記『放下』においては、「物への関わり内に於ける放下」(「技術的世界に対する同時的な然りと否といふこの態度」)、さらには「密旨に向つての開け」として論じているが、拙論では扱わない。ハイデッガー、『放下』(理想社、1963)、pp.26-28。

⁶ M.ハイデッガー、『ブレーメン講演とフライブルグ講演』(東京大学出版会、2021)、p.6。

⁷ 同書、p.6。

⁸ 同書、p.6。

⁹ 同書、p.6。

- ¹⁰ 同書, p.6.
- ¹¹ 同書, p.17.
- ¹² 同書, p.12.
- ¹³ 同書, p.22.
- ¹⁴ 同書, p.37.
- ¹⁵ 『フライブルグ講演』では、さらに踏み込んで述べられている。
- ¹⁶ M.ハイデッガー, 『ブレーメン講演とフライブルグ講演』(東京大学出版会, 2021), p.37.
- ¹⁷ ドキュメンタリー映画である『モンサントの不自然な食べもの』(マニー＝モニク・ロバン監督、2008)や『いのちの食べかた』(ニコラウス・ゲイハイター監督、2005)は、農業が工業化した世界の不自然さや無機質さを描いた映画である。
- ¹⁸ ハイデッガー, 『放下』(理想社, 1963), p.17.
- ¹⁹ M.ハイデッガー, 『ブレーメン講演とフライブルグ講演』(東京大学出版会, 2021), p.20.
- ²⁰ 同書, pp.38-39.
- ²¹ 同書, pp.40-41.
- ²² 同書, p.49.
- ²³ 同書, p.49.
- ²⁴ ハイデッガー, 『放下』(理想社, 1963), p.5.
- ²⁵ 同書, pp.15-16.
- ²⁶ 同書, pp.10-11.
- ²⁷ 同書, p.11.
- ²⁸ 同書, p.12.
- ²⁹ 引用は引用した著作で思惟と訳されていたのでそのまま引用しているが、拙論における思索と同じ単語、denkenである。
- ³⁰ 同書, p.12.
- ³¹ 故郷(Heimat)や土着性、思索については、詳しく検討する必要があるが、拙論では概略を示すにとどめる。ハイデッガーは『放下』のなかで思索を計算する思索と省察する追思索にわけて考えている(p.11)。
- ³² 川口由一・辻信一『自然農という生き方』(大月書店, 2011), pp.4-5.
- ³³ ドキュメンタリー映画『いのちの食べかた』は、近代農業の機械化され、無機質化した様子を無音のなかで表現している。そこで働く人間もまた無機質化した存在として描かれている。まさにハイデッガーが農業の工業化として述べていることがこの映画では描かれている。
- ³⁴ 川口由一・辻信一『自然農という生き方』(大月書店, 2011), p.100.
- ³⁵ 同書, p.100.
- ³⁶ 同書, p.100.
- ³⁷ しばしば川口は死体という言い方をする。
- ³⁸ 川口由一・辻信一『自然農という生き方』(大月書店, 2011), p.75.
- ³⁹ 同書, p.81.
- ⁴⁰ 同書, p.109.
- ⁴¹ 同書, p.112.
- ⁴² 同書, p.40.
- ⁴³ 同書, p.39.
- ⁴⁴ 同書, p.51.
- ⁴⁵ 同書, p.51.
- ⁴⁶ 同書, p.52.
- ⁴⁷ 同書, p.68.
- ⁴⁸ 同書, p.68.
- ⁴⁹ 同書, p.69.
- ⁵⁰ 同書, p.70.
- ⁵¹ 同書, p.70.
- ⁵² 同書, p.70.
- ⁵³ 同書, p.47.
- ⁵⁴ 同書, p.48.